

## 7・宮城県における文化財レスキュー活動 —とくに昭忠碑のレスキュー活動について

塩谷 純 東京文化財研究所 企画情報部 近・現代視覚芸術研究室長

### 0. はじめに

平成24年度の東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（以下、「救援委員会」）事務局では飯島満・綿田稔（6月まで）・塩谷純（7月より）が宮城県を担当し、宮城県被災文化財等保全連絡会議（以下連絡会議）との連携をとりながら文化財のレスキュー活動を行った。連絡会議による全体会議・幹事会に出席して情報の共有化を図り、また東松島市医王寺薬師堂薬師三尊像及び十二神将像について、離脱部材の確認・復位検討、塵埃除去、膠による接着等の作業立会い（10月、担当：皿井舞）といった実地での活動にも参加した。本稿ではとくに救援委員会が大きく関わった、仙台市青葉区にある昭忠碑のレスキュー活動について述べておきたい。

### 1. これまでの経緯

仙台北城本丸跡に建つ昭忠碑は、仙台に置かれた第二師団関係の日清戦争戦没者を弔意すべく明治35（1902）年に建立されたモニュメントで、今日では宮城県護國神社の管理となっている。高さ20m余りの石塔の上に両翼をひろげたブロンズの鶏を設置したもので、東京美術学校（現在の東京藝術大学）が制作依嘱を受け、図案を河辺正夫、ブロンズの原型製作を沼田一雅、鋳造を桜岡三四郎と津田信夫が担当したとされている。戦時中の金属供出も免れてその偉容を今に伝えてきたが、このたびの震災により塔上のブロンズ部分が落下、左翼部が断裂するなど大きく破損し、無残な姿をさらしていた。平成24年1月には、塔下に散乱していたブロンズの破片を人力で移動可能なものについては回収し護國神社が保管、あわせてブロンズ本体の移設等、今後の処置について話し合ったが、結局その移設先をめぐって決定をみず、次年度に持ち越されることとなった。

### 2. 平成24年度の活動

平成24年度には、昭忠碑について以下の活動を行うことができた。

① 6月26日 高所作業車を用いての塔上部の調査・作業

② 平成25年2月4～9日 ブロンズ本体の移設作業

平成23年度のブロンズ破片回収も含め、以上の活動は（有）カイカイキキ（代表取締役：村上隆氏）から文化財レスキュー事業に役立てるべく東京文化財研究所に贈られた寄付金により行われた。また平成24年度の活動については、国内にある屋外彫刻の調査保存で実績のある屋外彫刻調査保存研究会（会長：藤嶋俊會氏）の方々に負うところが大きい。上記の調査・作業にも積極的にご参加いただいた他、同会は6月3日の仙台でのシンポジウムの開催をはじめ、東京でも研究会を重ねて実施し、8月には昭忠碑の保存に向けた提言を護國神社に対して行っている。

①の調査では塔上部にも多くのブロンズ破片が散乱していることがわかり、その回収を行った。さらに塔上部に残存するブロンズ部を調査したところ、植物装飾の一つが緩んだボルト一本でかろうじて留まっていること、ブロンズの鶏を支えていた柱礎のくびれ箇所に亀裂が廻っていること、塔上で水平に張り出したコーニスに落下したブロンズの一部が衝突して陥没した穴がみられること等が確認された。応急処置として外れかかっている植物装飾をベルトで固定し、柱礎より上の部分をブルーシートで覆った。

②に際しては、懸案となっていたブロンズ本体の移設場所について、昭忠碑東側正面前に移設することになり、ただし同地が仙台市の管理する青葉山公園地内の一部であるため、同市の使用許可を受けた上での作業となった。（有）ブロンズスタジオと（有）石歩が工事を担当、昭忠碑前の地面に4.5×4mの鋼板床を設置し、2月7日に25tラフタークレーンによりブロンズ本体を吊り上げて鋼板床上に移動、その後プラスチック製波板で覆い掛けを作成した。

塔下へ落下したブロンズ部については、ひとまず移設お



昭忠碑ブロンズ本体移設の様子（平成25年2月7日）

よび破片の回収をもってレスキュー活動に一区切りをつけたわけだが、塔上部の処置に関しては、未だブロンズ装飾の落下の恐れや、雨水の塔内への侵入による塔全体の崩壊の危険性が残っている。移設したブロンズ本体にしても、その美術史的な意義を思えば修復が強く望まれるところである。同碑を管理する宮城縣護國神社には青葉城展示資料館があり、修復過程の公開等も含め、その展示活動の中に位置付けることも可能であろう。今後も、屋外彫刻調査保存研究会のような専門家集団の協力を仰ぎながら、明治期の稀少なモニュメントの保存修復に向けて、引き続き対策を講じていく必要がある。